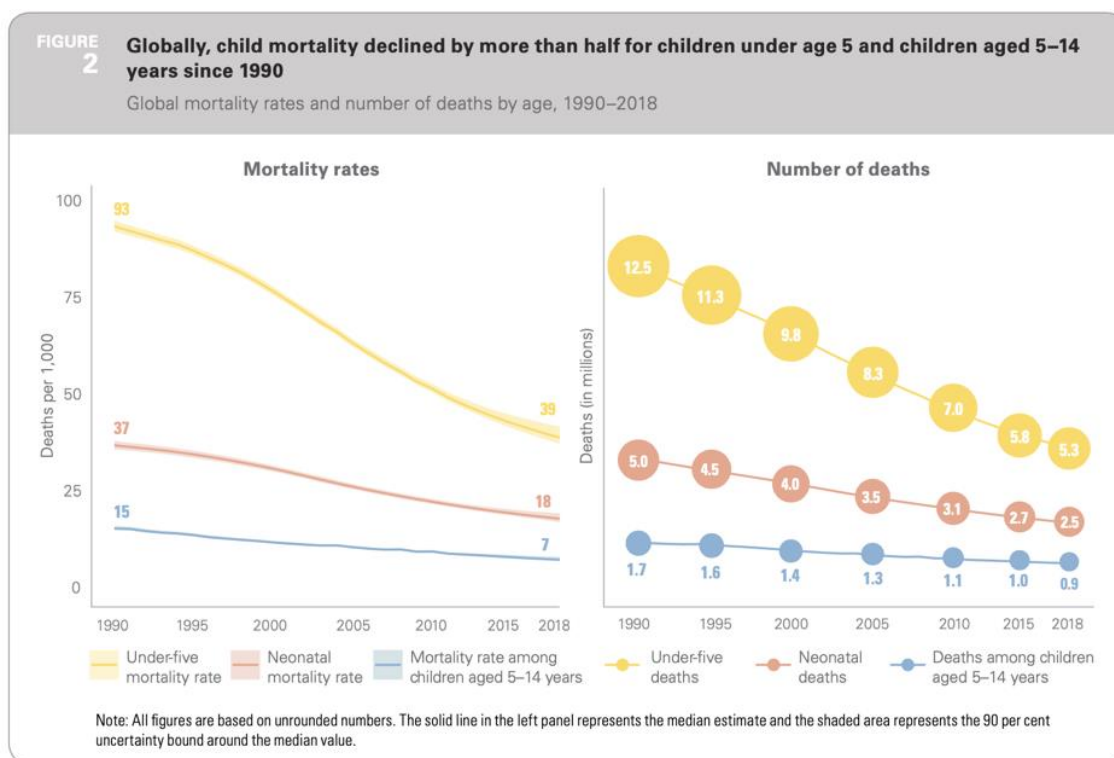


ホンジュラスの新生児死亡

新生児とは、生まれてから1ヶ月までの赤ちゃんのことをいいます。

今回は中米のホンジュラスという国で、この1ヶ月までの赤ちゃん、つまり新生児が、いったいなんで死んでいくのかということをお話します。

なぜ新生児なのか。実は、こどもの死亡数は世界でかなり減ってきています。公衆衛生や予防接種のおかげで、1990年には1250万人であった5歳以下死亡数が、2018年には530万人、じつに60%も削減されました（下図の黄色の線）。



5歳以下死亡数は改善しましたが、新生児死亡数（ピンク色の線）は思うように減少していません。たしかに改善はしていますが、改善するスピードは5歳以下死亡にくらべると緩やかであることがわかります。

新生児医療はまだまだ手付かずの状態なのです。

そこで今回はホンジュラスという中米にある国で新生児死亡の実際を調べた内容をお知らせします。

調査をしたのは、ホンジュラスの西に位置するレンピーラ県です。

レンピーラ県で2015年から2017年に死亡した新生児の数は253人でした。そのうち、生後1週間以内に死亡した赤ちゃんは201人、実に約80%が、生後1週間以内に死んでいます。

それでは、さらに詳しく死亡した赤ちゃんの内訳をみていきましょう。

次の表を見てください。レンピーラ県で死亡した新生児を在胎週数と出生体重で分類したものです。37週以降に生まれた赤ちゃんは全体の41.1%でした。それ以外は早産ということになりますので、約60%が早産ということになります。

Number of neonatal deaths by gestational week				
22-27	12	13	3	28(11.1)
28-31	18	23	7	48(19.0)
32-36	37	20	13	70(27.6)
37 \leq	49	45	10	104(41.1)
Unknown	1	2	0	3(1.2)

Number of neonatal deaths by birth weight				
<1000g	6	5	0	11(4.3)
1000g-1499g	8	17	6	31(12.3)
1500g-2499g	27	29	5	61(24.1)
2500g \leq	36	27	11	74(29.2)
Unknown	40	25	11	76(30.1)

Notes: Data are n (%) unless otherwise specified.

* Early neonatal death defined as the death of a newborn between day 0 and day 6 after birth.

そして、早産児の中でも32週以降に生まれた中後期新生児が一番多いことがわかります(27.6%)。出生体重別にみても、1500g以上2500g未満の新生児が一番多く死んでいます。早産児のなかでも、1.5kg以上ある中後期早産児になると、日本の周産期医療であればほぼ

大きなトラブルなく成長していきます。学校も普通に通えますし、早産というハンデはほとんどありません。

さらに重要なのは、ある程度の成熟が認められるこれらの早産児には、最先端の医療資源はあまり必要ではない、ということです。生存に最も必要なのは、保温、呼吸管理、そして栄養です。しかしこれらの早産児の呼吸管理には、人工呼吸器のような精密機械を必要とすることはあまり多くありません。

早産のため、すぐにミルクを飲むことができないので、ちょっと補助してあげることが必要です。まだ体温を自分で調節できないので、温めてあげることが必要です。しかし最低限、生存に必要なこれらの条件さえ整えてあげれば、ほぼ間違いなく救命できる。そんな命が、医療資源の乏しい地域では、数多く失われていっている、という事実がわかりました。

出典

UNICEF. Levels & Trends in Child Mortality: Report 2013-Estimates developed by the UN Inter-agency Group for Child Mortality Estimation. *Unicef/Who/Wb/Un*. 2019:1-32.

Kodaira Y, Sato N, Ikeda T, Aoyama S, Yoshikawa M, Otomo Y, Kamiya Y. Analysis on mortality among moderate to late preterm infants born in Lempira province, the Republic of Honduras, from January 2015 to June 2017. *Kokusai Hoken Iryo (Journal Int Heal)*. 2019;34(1):19-25. doi:10.11197/jaih.34.19.